

サルのすべり台

Constructing a Slide for Monkeys

仁平 義明 東北大学文学研究科心理学講座

● Text by Yoshiaki NIHEI

(Department of Psychology, Graduate Schools of Arts and Letters, Tohoku University)

仙台市の八木山動物公園のサル山に、すべり台をつくることにした。自分たちもすべり台で遊ぶことがある子どもたちに、サルがすべるのを見て喜んでもらいたいという気持ちも、もちろんある。しかし、最大の目的は、ニホンザルの遊び行動の伝播過程を行動が発生する最初からみていくこと

にある。八木山動物公園には、2008年7月、次のような研究計画書を出して研究を提案した。

その後、大学院生の今野君と一緒に動物園長を訪ね、最終的な了解をえた。今野君のお父さんはこの動物公園に勤

研究計画

ニホンザルの文化的行動の伝播の研究：すべり台遊び行動

1) 背景と目的

ニホンザルがすべり台で遊ぶ行動の伝播が、これまでイモ洗い行動について報告されているような発生と伝播の特徴を示すかを実験的に検討する。イモ洗いのようなニホンザルの文化的行動は、メスの年少の個体から自然発生し、主に血縁ルートで伝播していくことが多く、とくに老齢オスに伝播しにくいことが報告されている (Kawai, 1965)。

すべり台ですべて遊ぶという遊戯的な行動でも、この法則が再確認できるかどうかを検討するのが、本計画の目的である。遊戯的な行動が発生し伝播する場合は、むしろオスのコドモに起源があり、血縁ルートではなく、遊び集団ルートがメインルートになることも考えられる。動物のすべり台遊び行動については、ハシボソガラスの逸話的な行動があるが、学術的資料は存在しない。

ニホンザルの放飼場にすべり台を設置し、すべり台による遊戯行動を開始する個体を特定、それがどのようなルートで伝播していくかを、観察 (VTR) 記録する。

2) 社会的意義と学術的意義

この計画からもたらされると考えられる効果には、3つのものがある。

- (1) 動物園に来園するビジターとくに子どものビジターに喜びを与える

子どもたち自身がすべり台を好きであることから、ビジターの子どもたちは、サルが行っていることを喜んで見ると考えられる。

- (2) ニホンザル (コドモのサル) への環境エンリッチメントになる

サルのコドモにとって、限られた環境の中で、新しい遊具になる可能性がある。

- (3) ニホンザルの文化伝播の新しい実験的な研究の一つになる。

これまでの動物の文化的行動の伝播研究は、とくに食餌行動について偶然による発生を観察することが多かったが、非食餌行動の最初の発生から観察をする実験的な試みとしては、おそらく初めてのものになる。

3) 研究の展開の方法

- (1) 東北大学文学研究科心理学研究室と仙台市八木山動物園の共同研究とする。

- (2) すべり台の経費は、東北大学心理学講座が支出する。

- (3) 共同研究のメンバー

仁平義明 (にへいよしあき 東北大学大学院文学研究科心理学研究室教授)

今野晃嗣 (こんのあきつぐ 同大学院博士前期2年の課程大学院生)

仙台市八木山動物公園園長・飼育課長・ニホンザル飼育担当者

務しているのです、前園長さんのときから彼と一緒に動物公園での共同研究をお願いしていた。これまでに、動物公園ではニホンザルの性格測定の研究をしていたが [1]、私の思いつきで、すべり台遊び行動の発生と伝播の過程をみたくなったのである。

大学の会計係に行って相談すると、すべり台は大学の研究費で支出するなら「東北大学備品」にしななければならない、備品番号を打つことになるという。担当の千葉さんが仙台市にある公園遊具製作会社を探し出してくれたので、そこに製作の依頼をすることにした。すべり台は、高さ 1.5m、すべり面は 3.17m ということになった。

すべり台をせっかく設置しても、次の朝に行くと、ほとんどサルがすべって遊んでいたとしたら、研究はおじゃんになる。だから、とりはずし式にして、動物公園の休園日にセットしてはビデオで記録することにした。行動が群の中に広がるだけ広がったら研究の第一段階は終わり、取り付けばなしにするつもりである。

幸島でのニホンザルのイモ洗い行動は、幼いメスのサルに始まっている [2]。彼女が「イモ」と名づけられたのはよく知られた話。八木山動物公園ですべり台を最初にすべりだした個体は「スベル」と名づけてもらおうと思っている。

すべり台の設置目的は、間違いなく学術的なものである。しかし、そもそもなぜこのようなことを思いついたのか、正直な告白をしよう。私は以前に仙台市内でカラスがクルマミを自動車に轢かせて食べるハシボンガラスの自動車利用行動の伝播の研究 [3] をしていた。それで、行動の伝播には関心が強かった、というのは事実ではあるが、いかにももっともらしい理由である。

「サルスベリ」(百日紅) というすべりやすい木があるが、たぶんそれはたんなる比喻で、サルはすべらずに登るだろと考えたことがある。そうすればサルスベリではなく「サルノボリ」になる。そこで、昨年、動物公園にサルスベリの木を

サル山に立ててみないかと打診した。動物公園から反応はなかった。まじめな話だと思われなかったのは無理もないことかもしれない。そんなこともあって、今度はすべり台を考えた。好奇心は研究の母である。でも、サルがすべらないで逆に登るだけだったら、どうしよう。

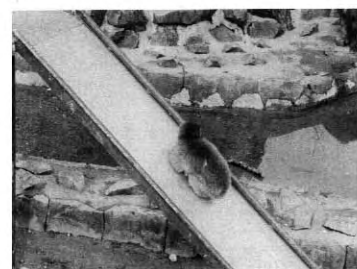
おそらく、このエッセイが公刊されるころには、すべり台が設置され、結果がわかっているはずである。

意図した笑いをとれないことを笑いの業界では「すべる」という。サルがすべるか、それとも私が「すべる」かである。

■ 文献

1. 今野晃嗣・村山美穂・友永雅己・仁平義明, 動物園で暮らすニホンザル *Macaca fuscata* のパーソナリティ測定. SAGA10 in Tokyo: 2007.
2. Kawai M. Newly acquired pre-cultural behavior of the natural troop of Japanese monkeys on Koshima islet. *Primates*: 6: 1965:1-30. (この論文は英文であるが、平田聡の翻訳により、河合雅雄「幸島のニホンザル自然群で新たに獲得されたプレカルチャー的行動」1997, 現代のエスプリ 359『行動の伝播と進化』35-74. (仁平義明編)として、日本語で読むことができる)
3. Nihei Y. and Higuchi H. When and where did crows learn to use automobiles as nutcrackers? *Tohoku Psychologica Folia*: 2001: 60: 93-97.

追記：本エッセイの送稿後、2008年10月20日、すべり台を設置した。設置してすぐに、見ている前ですべり台遊びが起こった。すべり行動を開始したのは、予測通り、2歳のオスのコザルだった。私は「スベル」と命名することをお願いしたが、大学に「スベル」は縁起が悪いという飼育担当者の意見で、名前は「ノボル」になった。



上の写真は原本にないものを追加 (09-1-9)